

夜も学校に居ることについて

田宮兵衛

井内先生と同じ職場、すなわちお茶の水女子大学文教育学部地理学科に勤めた期間は5年である。この間発見した先生と私の共通点で、きわめて明らかなことは、夜遅くまで研究室に残って何かしていることである。何かというのは、私の場合は、教材の準備であり、雑用であり、時々研究的作業がはいる。井内先生の場合も教材の準備が含まれていることは、コピー機械の使用が競合する際目撃する事実から推定できるが、その他のことはわからない。分かっていることは遅くまで学校に居るという事実である。このことは、余り知られていないことかも知れない。なぜなら、諸先生方は日没後自宅を含むであろう学外で研究活動を遂行されることが多く、また学生も学校から居なくなってしまう。したがって、井内先生や私が夜間習慣的に学校に居ることを証明できる人はきわめて乏しい。

ここで、学生が学校から居なくなることに付いて若干補足する。これに関しては、講義が終わった直後の16時半にはほとんどの学生が居なくなるのはいささか早すぎるのではないかという感想を持っている。念のため付け加えるが、22時や23時まで居なければいけないということではない。居なくなるのは、学校が勉強できない環境となっているので、それにしたがって形成された習慣であろう。これが、文科系である文教育学部の特性なのか、女子大学の特性なのか、それとも他に理由があるのかまだ分からないが、重大な問題であるので検討は別途に行うことにして話をもとに戻す。

井内先生や私が学校に遅くまで居ることの原因は、先生との雑談等を総合してみると、前職と関連すると考えるのが順当である。すなわち、先生も私もいわゆるお役所に勤務するお役人であった。国立大学の教官も役人の一種ではあるのだが、お役所と大学はだいぶ違う。たとえば、大学教官を含む教育公務員には残業は無いが、お役所の公務

員は偉くない段階では、残業することができる（させられる）。大学の教官を昼間尋ねていっても会えないことが結構あるが、お役人は居るのが原則である。以上は事実であるが、このへんから先の話は私の経験であり、職種等々が異なる井内先生と共通することかどうかは知らない。

お役所の仕事には、こまごましたものが多い。その種の仕事は昼間片付けるのが原則である。他の役人との折衝も含まれるので相手が必ず居る昼間でないと話が進まないことも多い。他方、多少は時間をかけてこなさなければならないものも結構ある。この場合には、細かな仕事が終わった夜になるのを待たねばならぬ。昼間し残した仕事を処理するのが残業であるが、残業はまとまった時間を必要とする仕事になることが多い。そういう仕事を家に持って帰ってまでこなすことは余ほどのことではなければ無い。それは、心底から楽しくてやっている仕事ではないからである。

そうこうしているうちに、職場に遅くまで居る習慣がついてしまった。そのかわり、家に帰ると基本的に何もしない。新聞やテレビを克明に見てしまうのである。新聞はともかく、テレビは同時にいくつかの放送をやっているので全放送を見届けることはほとんど不可能に近い。私の場合は5年目にしてやっと反省しつつあり、家に帰って仕事をしなければならぬと考えているが、まだ圧倒的に学校で何かしていることが多い。この原稿も夜学校で書いている。

井内先生は大学に勤務されるようになって私よりずっと長い期間が過ぎている。それを考えると、早く家に帰って仕事をするという私の構想は達成できるかどうかわからなくなった。しかし、先生の場合は、もう一つの条件として、居住地が学校に近いという条件がある。私の場合はこの条件が無いから、そのうちに早く家に帰ることになるであろうと期待している。